

令和元～2年漁期のイセエビ漁況と予測

1 令和元年漁期のイセエビ漁況

イセエビは、静岡県では伊豆半島で水揚げが多く、重要な磯根漁業対象種となっており、当场では漁期前の9月に下田・南伊豆地区漁況予測を行っています。

図1・2に下田・南伊豆地区の漁獲量の経年変動を示しました。近年、両地区とも高い水準の漁獲でしたが、令和元年漁期(令和元年9月～令和2年5月)は下田で漁獲量18.1トン(前年比61%)、子エビ混獲尾数24,889尾(前年比67%)、南伊豆で漁獲量20.6トン(前年比54%)、子エビ混獲尾数68,903尾(前年比69%)といずれも前年漁期より減少しました。子エビ混獲尾数はそれほどではありませんが、漁獲量の減少は顕著でした。下田、南伊豆とも平成以降、最低の漁獲量でした。

この原因を検討してみました。昨年から今年にかけて、操業日数を減らす二つの要因がありました。一つは昨年10月12日に伊豆半島に上陸し県内に大きな被害を与えた台風19号、もう一つは今年2月以降のコロナ禍*です。表1に操業日数、CPUE(一人当たり1日当たり漁獲量・子エビ尾数)の減少割合を示しました。平成30年漁期に対する令和元年漁期の延べ操業

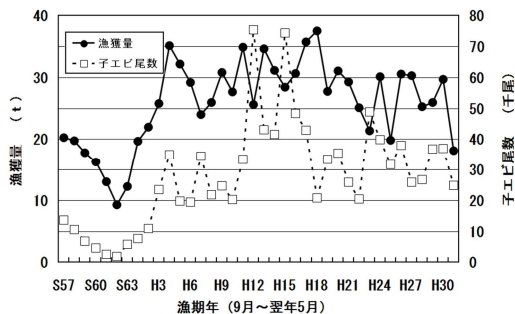


図1 下田地区におけるイセエビ漁獲量と子エビ混獲尾数の経年変動

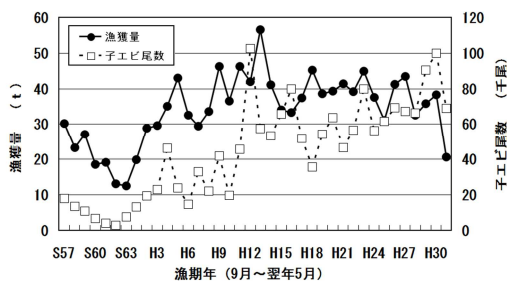


図2 南伊豆地区におけるイセエビ漁獲量と子エビ混獲尾数の経年変動

表1 平成30年漁期に対する令和元年漁期の減少割合

項目	減少割合(令和元/平成30)	
	下田 (全地区)	南伊豆 (下流・大瀬)
延べ操業日数(E)	68%	68%
漁獲量(kg C1)	61%	57%
CPUE(C1/E)	89%	85%
子エビ尾数(C2)	67%	81%
CPUE(C2/E)	99%	119%

*コロナ禍でイセエビの消費が滞り、浜値が極端に安くなり、操業が自粛された。

日数の減少割合は下田全地区では68%、南伊豆の下流・大瀬地区でも68%でした。台風19号とコロナ禍で操業日数が7割に減ったと考えてよいでしょう。また、漁獲量を操業日数で割ったCPUEは資源量の指標ですが、CPUEの減少割合は下田全地区の漁獲量では89%、子エビでは99%、南伊豆の下流・大瀬地区の漁獲量では85%、子エビでは119%でした。資源量は漁獲対象では8~9割に減り、子エビでは下田では変化がなく、南伊豆では増えていると考えられます。CPUEの減少に比べて、操業日数の減少が大きいため、漁獲量減少の主因は操業日数の減少と考えられます。

2 令和2年漁期のイセエビ漁況予測

(1) 白浜定地水温の経過と予測

沿岸の海水温に大きく影響を及ぼす黒潮の流路は、大蛇行が終息する兆候が見られず、12月頃まではA型が継続すると予測されます。

8月下旬の白浜定地水温は「やや高め」で推移しました。県取締船「あまぎ」が8月30日に実施した水温観測結果では、伊豆半島南東沖で表層から15m深まで30℃が観測されており、過去35年間では類を見ない高水温になっていました。12月までの相模湾の水温は「平年並み」を含む「高め」で推移すると予測されていることから、南伊豆・下田地先の海水温も12月まで「平年並み」~「高め」で推移し、イセエビに好適な環境になると考えられます。

(2) イセエビ漁獲量の予測

ある年の子エビの混獲尾数と、その翌年の漁期のイセエビ漁獲量との関係（子エビの混獲尾数が多いほど翌年のイセエビ漁獲量も多くなる）から導いた計算式に、令和元年の子エビ混獲尾数を代入し、令和2年漁期（9~翌年5月）の漁獲量を推定しました。その結果、下田地区は昨年の漁獲量（18.1トン）を上回る27.0トン（図1・3）、南伊豆地区は昨年の漁獲量（20.6トン）を上回る40.2トン（図2・4）と推定されました。（長谷川雅俊）

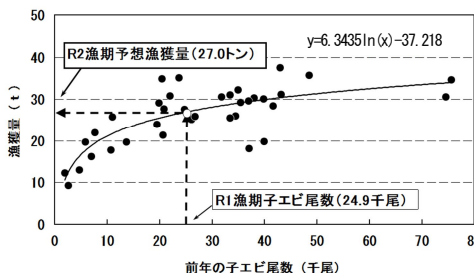


図3 下田地区の子エビ混獲尾数と翌年の漁獲量の関係

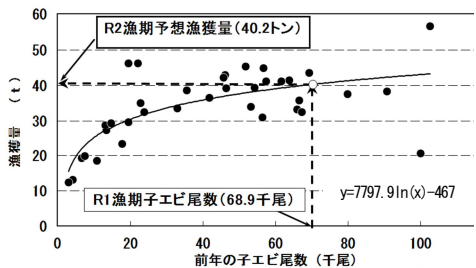


図4 南伊豆地区の子エビ混獲尾数と翌年の漁獲量の関係